



監督＝ジョエル・シュマッカー
 ／出演＝ケイト・ブランシェット
 ／ジェラルド・マクソーレイ
 ／シアラン・ハインズ（ブエ
 ナ ビスタ インターナショナル
 〈ジャパン〉 配給／2003年アメ
 リカ映画／98分）

ヴェロニカ・ゲリンが6発の銃弾に倒れたのは1996年6月26日。新聞記者のヴェロニカによる麻薬取引と麻薬犯罪の実態を暴くための取材は、現場を歩き、情報提供者から直接情報を集めるといったコワイやり方。だから彼女が凶弾に倒れたのは、その報復によるもの。実話に基づく真実の物語は、ケイト・ブランシェットの熱演を得てすごい迫力！

🎬 実在の新聞記者の真実の物語

この映画の主人公ヴェロニカ・ゲリン（ケイト・ブランシェット）は、アイルランド最大の発行部数を誇るメジャーの新聞『サンデー・インディペンデント』の記者。そして、その活動の舞台はダブリン。ヴェロニカはジャーナリストとして、麻薬取引と麻薬犯罪が横行しながら警察を含めて誰もこれを摘発できず、ワルが栄える中で、多くの子供たちがその犠牲になっていることに心を痛めていた。この不幸な子供たちの実態と、麻薬取引によって莫大な富を得ている犯罪者の実態を広く社会に報道しなければと考えたヴェロニカは、敢然とその取材と報道を開始した。この映画は、この実在の新聞記者ヴェロニカ・ゲリンの真実の物語だ。

🎬 ヴェロニカの取材方法はちょっとコワイ……

今の日本の新聞報道は、すべて「記者クラブ制」、別名「発表ジャーナリズム」となっている。「〇〇署の調べによると」、「〇〇省の調査では」といった書き出

しで始められる記事が多いのは、このためだ。このため統一的・画一的な情報が提供され、感性を失った多くの新聞記者たちはこれをそのまま紙面に載せるだけ、というパターンが多くなり、新聞社ごとあるいは新聞記者ごとのユニークな取材や報道が少なくなっているのが実情。この観点からは、田中康夫長野県知事が2001年5月15日に発表した『『脱・記者クラブ』宣言』を勉強する必要がある。つまり、新聞記者は、記者クラブから与えられた情報をそのまま書くだけではダメ。横並びの記事とは違う、一步踏み込んだ記事を書くために「特ダネ」を集めようとすれば、徹底した情報集めが必要だし、そのためにはオモテ・ウラを問わず、情報提供者を見つける努力が必要だ。

今の日本でこのような取材をやり、一定の「成果」をあげているのは、唯一芸能分野だけだろう。芸能レポーターとして有名な梨元勝氏は、徹底した情報集めが「売り」であり、強み。だからこそ、たまに失敗はあるにしても、梨元レポートには説得力がある(?)わけだ。

ヴェロニカの取材は、いわばこの梨元方式。つまり、徹底した現場主義と情報提供者からの直接の情報集めだ。もっとも、これが芸能ネタであれば危険は少ないが、麻薬取引や麻薬犯罪の実態について、徹底して現場に入り込むとなれば、そりゃコワくてヤバイ。ヘタすると身の危険にさらされることにも……。

衝撃的な冒頭とラストのシーン

冒頭は、何回も駐車違反とスピード違反をくり返していたヴェロニカが何とか罰金だけで済み、車の免許取り消しにならなかったことに喜ぶシーンが描かれている。裁判所からの帰りの車の中で、携帯電話で家族に喜び勇んで結果報告をするヴェロニカ。そのヴェロニカの車が赤信号で停まった時、2人乗りのバイクがずっとその右隣に止まり、いきなりピストルをヴェロニカめがけて乱射。これによってヴェロニカは即死。この日が1996年6月26日だ。この衝撃的な射殺シーンは、映画のラストに至って再度、詳しく再現される。ヴェロニカによる麻薬取引の実態を報道するための、体当たりの取材によって痛手を受けた麻薬犯罪の黒幕であるギリガン（ジェラルド・マクソーレイ）や、組織の一員でありながら一定の情報提供をしていた 트레이ナー（シアラン・ハインズ）などが、ついにキバを

むいたわけだ。理想は理想としても、やはり現実にはキビしいものがある……。

ヴェロニカを演ずるのはあのケイト・ブランシェット

ヴェロニカを演ずるのは、『エリザベス』（98年）でアカデミー主演女優賞にノミネートされたイギリスの演技派女優ケイト・ブランシェット。2004年の第76回アカデミー賞で11部門を受賞した『ロード・オブ・ザ・リング—王の帰還—』では、ちょっと不思議な女性のガラドリエル役で登場している。『恋におちたシェイクスピア』（98年）のグウィネス・パルトロウと比べれば、もともとあまり美人女優ではない（失礼？）が、その演技力は抜群。ジャーナリストとして麻薬取引や麻薬犯罪の取材に大きな価値を見出しながらも、愛する夫や息子との家庭生活や家族の絆を大切にしているヴェロニカの姿、さらには誰でも当然コワイ、脅迫の恐怖と闘いながら取材を続けるヴェロニカの姿を、このケイト・ブランシェットが見事に表現している。

何が変わったのか？

明治維新において大きな役割を果たした土佐藩の浪人坂本龍馬は、1867年11月の近江屋事件で盟友の中岡慎太郎とともに「見廻組」に襲われて死亡した。しかし、龍馬の死後、龍馬の影響を受けた多くの若者たちの力によって日本が大きく変わったことはまちがいない。

それと同じように、1996年6月26日のヴェロニカの死亡、それもヴェロニカが書く新聞記事の報復として、白昼堂々とピストルで射殺されるという事件は、アイルランド国民に大きな反響を呼び、麻薬取引と麻薬犯罪撲滅のための国民的運動に発展していった。その第1は、ヴェロニカの死亡事件を契機として、ダブリンの麻薬密売人たちの退去を要求する壮大なデモが展開される中で、麻薬密売人たちが今まで住んでいたアパートから追い出されたこと。第2は、ヴェロニカを殺害した実行犯2人はもとより、その黒幕のギリガンも逮捕されて有罪判決を受けたこと。そして第3にすごいのは、麻薬取引の犯罪者が麻薬取引によって不法に得た金を国が没収できるという法律が制定され、さらに「Criminal Assets Bureau（犯罪資産局）」と呼ばれる特別機関が創設されたこと。これによって、

ギリガンらが所有していた莫大な土地などの資産はすべて CAB 管理下に置かれることになった。このようにヴェロニカの死亡は、アイルランドの麻薬取引や麻薬犯罪に大きな影響を及ぼしたのだ。

✂ 迫力ある真実の物語！

映画は、主人公ヴェロニカの行動とその心理を丹念に追っていく。とにかく行動的なヴェロニカ。取材に失敗しても、脅迫を受けても、それに負けることなく常に前向きにジャーナリストとしての自己の使命を果たそうとするヴェロニカ。こんな危なっかしいヴェロニカを心配しながらこれを応援するのは、母親のバーニー（ブレンダ・フリッカー）と優しい夫のグレアム（バリー・バーンズ）。ヴェロニカと夫のグレアムは映画の中で何回もケンカするが、結局折れる（？）の

ここまでやれる？ 記者諸君

「脱ダム宣言」等で世論をリードする田中康夫長野県知事は、01年5月「脱記者クラブ宣言」を発表した。日本社会に根付いてきた記者クラブ制とは、「〇〇署（部）の調べ（発表）によると」という形での新聞報道。日本ではこの記事が大半年で、別名「発表ジャーナリズム」。権力側から一方的に情報を提供するような制度が定着すると、新聞記者は自らの足で取材しなくなるのも当然。今や記者クラブ制に頼らず、自分の足で直接情報を集めるのは芸能レポーターだけ（？）。

しかし、映画「ヴェロニカ・ゲリン」でケイト・ブランシェットふんするヴェロニカは違う。彼女はアイルランド、ダブリンのサンデー・インディペンデント紙の記者だが、その取材方法は現場へ行き情報提供者から直接情報を集めるも

の。芸能ネタなら危険は少ないが、彼女が情熱を傾けたのは麻薬犯罪の実態だから深く突っ込みすぎるとヤバイ。彼女は、うまく仕事と家庭を両立しなければダメ、と考えなかった。そのため麻薬犯罪で巨額の富を



築いたワルから、家に弾を撃ち込まれたり、暴漢から右足を撃たれたり。それでも懲りずに彼女は取材に乗り込んだが、そこでは顔面を殴打されて血まみれに。ホントにここまでやれるの？

日本の新聞記者諸君は自分の胸に手をあてて、よく

考えてほしい。私もここまでやれとは要求しないが、弁護士として司法記者クラブでの通り一遍の取材に幻滅している私は、少しでもこのヴェロニカのつめのあかをせんで飲んでもらいたいと思う。

彼女が白昼、車の中で凶弾に倒れたのは1996年6月26日。しかし彼女の死は無駄ではなかった。この日を境に麻薬密売人を排除するデモは大規模となり、殺人の実行犯やその黒幕は逮捕され有罪判決が下された。また、麻薬犯罪者が不法に得た金を国が没収できる法律が制定され、犯罪資産局（CAB）も創設され、黒幕の資産はすべてCABの管理下に移された。こんな実在した素晴らしい女性記者の物語に感動！マスコミ関係者必見の映画だ！

（弁護士 坂和章平）

映画

産経新聞 平成16(2004)年3月19日

は夫のグレアム。それほどヴェロニカのジャーナリスト根性は、根がすわっているということだ。

しかし、もちろんヴェロニカ本人は「スーパーウーマン」ではない。ジャーナリストとしての目的意識が人と比べれば少しは強いものの、優しい夫と愛する息子との幸せな家庭を守ろうとする普通の女性。したがって、家の窓にピストルの弾を撃ち込まれたり、現実には暴漢からピストルで足を撃たれたり、さらにはギリガンを取材した時、ギリガンからモロに顔面を殴打されたりすれば、そりゃコワくなるのが当然。しかし、ヴェロニカは、そのコワさを世間（相手）に見せず、敢然と次の取材に挑戦していった。

こんな根性のすわった新聞記者を私は知らない。ここまで身体を張って、また生命を賭けて取材しろ！ とは私も言わない。しかし私の本業である弁護士業務の展開の中で、前述の「記者クラブ制」の取材に、いいかげん嫌気がさしている私としては、「ヴェロニカの爪の垢を少しでも煎じて飲め！」と今の若い新聞記者諸君に言いたい気持だ。もちろん、私が言わなくても、この映画を観た現職の真面目な新聞記者なら、誰でも自分の胸に手を当てて、果たして自分は……？ と考えるはず。そして、そんな思いの集積によって世の中が変わるはずだ、ということはこの映画は教えてくれているが……。

2004(平成16)年3月9日記

ミニコラム

実録モノのトップは？

日本ではヤクザ映画の人気は根強い。高倉健の『昭和残侠伝』、『網走番外地』シリーズや高橋英樹の『男の紋章』シリーズ、そして緋牡丹お竜こと藤純子の『緋牡丹博徒』シリーズや近時の岩下志麻の『極妻シリーズ』は国民的(?)大人気。また深作欣二監督が菅原文太主演で広島ヤクザ抗争を描

いた『仁義なき戦い』シリーズは実録モノとして一世を風靡した。しかし何ととっても実録モノのトップは、『実録安藤組 襲撃篇』(73年)。そりゃ元本職ヤクザ安藤昇氏のご登場だから、その迫力はスゴイ。『実録 阿部定』(75年)と並ぶ実録モノの代表作だ！